

惠崇春江晚景二首

其一

竹外桃花三两枝

竹外に桃花 三两枝

春江水暖鸭先知

春江水暖かなるは鴨先づ知る

蒹蒿满地芦芽短

蒹蒿地に満ち 芦芽短し

正是河豚欲上时

正に河豚上らんと欲する時

【通釈】

竹むらのかなたの桃の枝の、ふた枝み枝に花が開き、春の江に水ぬるめば、あひるがまっ先に感知する。

しろよもぎは生い茂り、あしの芽はまだみじかい。いまこそふぐが江をさかのぼってこようという時だ。

其二

兩兩歸鴻欲破羣

両々 帰鴻 羣を破らんと欲す

依依還似北歸人

依依として 還た似たり北歸の人に

遙知朔漠多風雪

遙に知る 朔漠は風雪の多きを

更待江南半月春

更に待て江南 半月の春

【通釈】

二羽ずつつれだつて北へ帰つてゆく雁の隊列は、こころなしか乱れがちにみえる。南の国にこころひかれてさりがての、北へ帰る旅人の姿にそっくりである。はるかゆくてにひろがる沙漠では、まだしばしばげしい吹雪にみまわれることと思えるので、あと半月、江南の春の陽光のもとで、待ちあわせるがよい。

蘇東坡 近藤光男より抄出

惠崇 秋浦双鴛図



・元豊八年（一〇八五）50 十二月、京師の官に在つて作る。

・惠崇（積惠崇、建陽（福建省建寧県）の人。董源の流れをうけ、北宋山水画の三大家の一に数えられる。このんで鶩・雁・鷺を画き、小景にたくみで、とくに寒汀遠渚の瀟洒虚曠のさまはたれもまねがたいといわれる（図繪宝鑑卷三）。

・晚景 晚景となつてゐる本もある。

・鴨先知 東坡が元豊二年（一〇七九）

桓山に遊んだときの詩に「春風流水に在り、鳧雁先づ拍拍」拍は羽ばたく音。白居易の詩に「秋霜下らんと欲て、手先づ知る」（寒閨怨 集卷十九）

・蒹蒿・芦芽 結句に河豚がうたわれるが、ふぐを食べるとき、しろよもぎ（蒹蒿）はおひたしにし、あしのめ（芦芽）はあつものにして食べると毒けしになるという。梅堯臣の詩に「春洲に荻芽（あしのめ）生じ、春岸に楊花飛ぶ。河豚是の時に當つては、貴くして魚鰕に数へられず」（集卷五）。ほか諸説は、明の陸容の菽園雜記卷九、清の吳景旭の歴代詩話卷五十六に詳しい。

・河豚 もちろん画面にはなく、東坡の連想。河豚は海産のふぐより小さく、揚子江下流、とくに鎮江を中心とした大運河一帯に四、五月ころとれるのが美味とされる。食べかたは日本とちがい、有毒の部分をとりのけ、丸のまま火鍋子（まんな中にえんとつのあるなべ）に入れ、よせ鍋式にして食べる。中国人の食べるふぐが、みな淡水産で、半透明の肉やその味が、上等の豚肉に似ているところから、河豚というのであろう。々鮭が中国では日本でいうふぐにあたる。（小竹文夫「中国の魚」中国菜二号）。

・欲上 上は河豚が江をさかのぼること。菽園雜記に引く宋の范成大の呉郡志によれば、河豚は江の下流の江陰県あたりで一月、金陵（南京）あたりで二月から三月、当塗県（安徽省）では三月に、それぞれ出まわるといふ。

・両両 漢書の天文志に「魁（斗柄）下に六星、両兩相比ぶ」

・依依 離れるに忍びぬさま。

「依依として旅人に似たり」